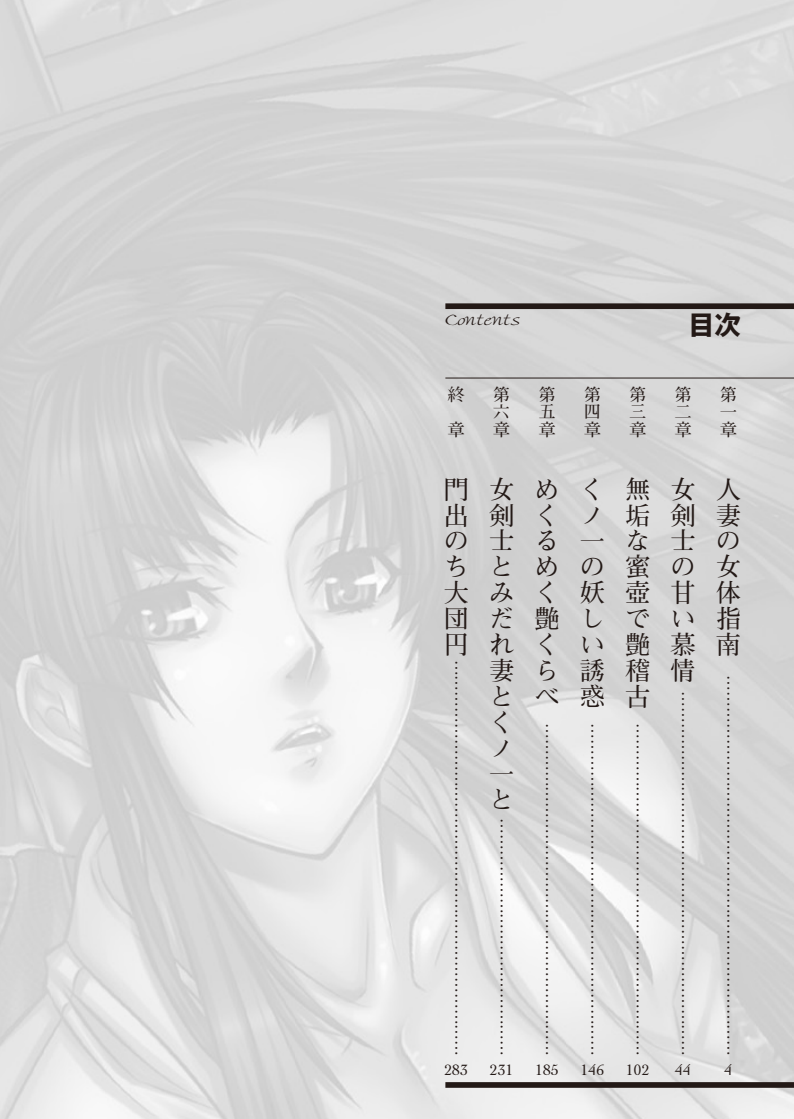
艶めき剣舞

女剣士とみだれ妻とくノ一と

天草白
挿絵／asagiri

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章　人妻の女体指南……4
第二章　女剣士の甘い慕情……44
第三章　無垢な蜜壺で艶稽古……102
第四章　くノ一の妖しい誘惑……146
第五章　めくるめく艶くらべ……185
第六章　女剣士とみだれ妻とくノ一と……231
終　章　門出のち大団円……283

登場人物 *Characters*

藤木悠馬
（ふじき　ゆうま）

加賀藩勘定方の家の次男坊。家の客人だった男に父を惨殺され、仇討ちのために修行をしている。気弱なところもあるが、心の芯の部分は強い。

沙夜
（さや）

悠馬の幼馴染み。堅物な上に勝気な性格で、剣一筋に生きる女剣客。

綾乃
（あやの）

香林坊の小間物問屋・石黒屋の内儀。包容力のあるおっとりとした女性。

桔梗
（ききょう）

折に触れて悠馬の目の前に現れる妖艶な女性。加賀忍軍の末裔の渡世人。

南方兵衛
（みなかた　ひょうえ）

藤木家の客人として迎え入れられていたが酔った勢いで当主を殺害してしまう。悠馬にとっては父の仇。

「ん、ぐっ」
眼下からもれる沙夜のうめき声を聞きながら、悠馬の肉筒の先端には稲妻もかくやというほどの熱い痺れが駆け巡る。
「ううっ、出る！」
悠馬は沙夜の唇から己の肉茎を引き抜くと、さらにもう一回り膨れ上がった先端部から大量の精液を噴き出した。まさしく雨のごとく、白濁した体液が沙夜の顔めがけて次々とはじけ散る。
「あつ……い。ああ、悠馬どの……こんなに」
栗の花を思わせる匂いが周囲にたちこめ、ムッとするほどの性臭を浴びながら、沙夜は陶然とした口調であえいだ。凛々しい美貌は右の頬や鼻の脇、さらには桃色をした唇にまで白濁が飛び散り、淫らな化粧を施されていった。
男の体液によって妖しく相貌を染めた沙夜を見下ろし、悠馬はぞくりとするほどの色香を感じて背筋を震わせる。
「ふう、こんなにたっぷりと出るものなのだな。殿方の……アレ、は」
精という言葉を使うのが恥ずかしいらしく、顔中を妖しい白濁に染めた沙夜は『アレ』などという言葉で誤魔化しながらうつむいた。鼻梁をつたって垂れ落ちた白濁が

唇の隙間に流れこみ、けほっ、と短くせきこむ。
「に、苦い……しかし、これが……う、くっ……ゆ、悠馬どのの、味か」
何度もため息をこぼしながら、沙夜はおそるおそるといったようすで一滴の精液を飲みこんでくれた。
と、彼女の眼前でいまだ屹立を失わない男根が上下にしなって揺れる。凛とした女剣士の可愛げたっぷりな所作や、己の子種で気高い美貌を染め上げた征服感があいまって、悠馬の欲望は衰えるどころか、さらなる上昇を見せていた。
沙夜の身体をもっと貪りたい。沙夜のもっと艶めいた姿を見たい。沙夜を限界まであえがせ、屈服させてみたい。
雄としての欲情が悠馬の肉棒に活力を与え、先端が臍にくっつきそうなほど陽根がそそりたつ。
「えっ！　まだ……続けて？」
「沙夜どのの顔を見ていたら、一回くらいでは満足できない。もっと……もっと色々なことをしたい。沙夜どのが嫌でなければ」
「褒美だと申した以上、最後まで付き合うのは当然だ。剣士に二言はない」
沙夜はいつもどおりの勝気な口調できっぱりと言い放った。

「では今度は……」
脳裏に、以前から一度試してみたかった体位が思い浮かび、悠馬は思いきって素直な気持ちを打ち明けてみた。
「よ、四つん這いだなんて、この私が」
沙夜は艶やかな黒髪を振り乱し、首を左右に激しく振った。
「断る！　私にだって誇りもあれば、羞じらいというものもあるのだ。いくら相手が悠馬どのとはいえ、犬のように這いつくばって尻を出すなど――」
「褒美をくれるのだろう。約束だ、沙夜どの」
悠馬には悪戯っぽく笑って沙夜の反応を楽しむ余裕さえ芽生えていた。人妻の綾乃によって男女の秘め事を知り、女を喜ばせる技巧を習い、さらには沙夜の純潔を奪った……いくつもの経験が悠馬に男としての自信を植えつけていた。
残念ながら剣ではいまだ沙夜にはかなわないが、男と女のことでなら自分に一日の長があるという自負があった。
「……悠馬どのは、こういうことになると本当に別人のようだ。私はこの間まで生娘だったというのに」
沙夜は諦めたような顔でため息をついた。あくまでも凛とした表情は崩さぬままに

悠馬を軽くにらみ、もう一度盛大に吐息をこぼすとその場に両手をつき、続いて両膝もついた。

「ああ、沙夜どの……」

あの凛々しい沙夜が自分の足元で四つん這いになっている。悠馬の下腹を新たな衝動が荒々しく突き上げた。先ほど精を放ち、なかば萎えた状態だった陰茎がたちまちのうちに脈を打って、男としての反応を示しはじめる。

「こんなにして。さっきあれほど出したのに」

沙夜は軽く息を飲んで、眼前でむくむくと膨らんでいく男根を見やった。おそるおそるといった感じで手を触れ、白濁がこびりついた亀頭部を手のひらでさする。

「う……」

精を放ったばかりで多少麻痺している亀頭粘膜も、美貌の女剣士に触れられていると少しの刺激でも鋭敏に反応してしまう。ピリピリとした痺れとも快美ともつかない感覚が亀頭の表面を走り、悠馬は思わず腰をうねらせた。

沙夜が両手のひらで包みこみ竿の部分をゆっくりと上下にこする。堅物の上にこの間まで生娘だった沙夜も、悠馬との性体験を通じて、幾分ではあるが男女の秘め事のいろはを学び始めたらしい。

このままでは沙夜に手淫されているだけで、ふたたび射出してしまいそうだ。危機感を覚えた悠馬はたおやかな手を払いのけるようにして、おもむろに女剣士の背後に回りこんだ。

「きゃあっ、な、なにを⁉」

驚く沙夜を無視し、鍛えられて引き締まった双臀に両手を這わせる。

「こうすると、沙夜どのの中がよく見える」

綾乃に比べると肉づきが少なく、二十一歳の生硬さを感じさせる二つの尻肉を、悠馬は左右順番に撫でさする。わずかに汗ばんだ肌は滑らかそのもので、丸い曲線に沿ってくすぐるように指先でなぞると、沙夜の下腹がびくん、と波打った。

「だ、だめ……ぇ！　見ないで……！」

ふいに女剣士の声が弱々しい悲鳴へと変わった。

か弱い大和撫子そのものの拒絶を無視し、悠馬はかぐわしい女の香りを漂わせる臀部へさらに顔を近づけた。深い尻の谷間のちょうど中央部に、まばらに生えた黒い恥毛と淡く色づいた女の秘園が見えた。

先日までぴったりと閉じていた処女の門はわずかに口を開き、膣穴はひくひくとうごめいている。

唇にそっくりな形をした淫らな器官に己の唇をつけると、沙夜の秘処は綾乃とはまったく違う感触がした。純潔を失って間もないためか、それとも綾乃よりも十歳以上若いためかはわからないが、人妻の柔軟な秘園に比べて膣肉全体が引き締まり、生硬さを感じる。

「んっ！」

女にとってもっとも秘められた箇所に口づけを繰り返していると、沙夜が押し殺したような悲鳴をもらし、同時に双臀を上下に跳ねさせた。

悠馬は尻の谷間に顔を押しつけるようにして、充血しつつある秘唇へ口づけを浴びせる。肉づきの薄い花弁を舌先でこじ開け、狭苦しい内部へと押し入らせた。さすがに性体験のほとんどない沙夜の内部は生乾きの状態で、潤いも少ない。

無理をすれば粘膜を傷つけかねないと頭の中で警鐘を鳴らし、悠馬は慎重に舌先を押し進めていった。ゆっくりと撫でるように舌をくねらせ、起伏の少ないつるりとした粘膜を舐めしゃぶる。

「んっ……くうっ」

沙夜の背中が弓なりに反った。

「む、ちゅ……だ、大丈夫か……ぐぐ、む……沙夜どの？」

「す、少しくすぐったいけれど……平気……あんっ」
やはり経験が少ないだけあって快楽を得るよりも、異物感のほうが大きいのだろう。沙夜は幾分戸惑ったような声を上げる。悠馬は内部だけでなく二枚の陰唇にも舌を這わせ、未発達な性器全体を丹念に舐めていった。
悠馬の細心な愛撫が功を奏したのか、わずかにほころび始めた花弁の奥から、甘酸っぱい味のする液体が染み出してきた。まるで岩清水だ。舐め取ってみると芳醇な味わいが舌の先から付け根にまで広がった。
（濡れてる……！）
「あ、な、なに、これ……はぁぁっ……!? も、もれてしまう」
愛蜜の漏出に沙夜自身も戸惑っているらしく、すらりとした下肢をばたつかせて狼狽の声を響かせた。悠馬は今おこなっている口唇愛撫に自信を得ると、今度は肉溝の上部に目をやった。
周囲に比べてわずかに色が濃い肛門の窄まりがたたずみ、まるで悠馬に見られるのを羞じらうかのように震えている。
「いや、そんな場所まで……、み、見ないで、お願い……」
悠馬の視線に気づいたのだろうか、女剣士は声を震わせて哀願した。

別人のように弱々しくかすれた沙夜の声を聞きながら、悠馬は逆に愛しい幼馴染みに意地悪を仕掛けようと排泄器官へ指先を伸ばしていった。指の腹で綺麗な放射状の皺に彩られた肛環に触れ、円周に沿ってなぞる。

悠馬が指に力を入れるのに合わせ、小さな菊肛がひく、ひく、と震えた。

「だ、だめぇ、もうやめて……」

さすがの沙夜も降参の悲鳴をあげて、引き締まった美尻をくなくなと左右に振り乱した。悠馬は逃げる沙夜の双尻を追いかけ、左右の丸い肉が織り成す谷間へとさらに深く顔を突っこんだ。

指と舌とで同時に二つの穴を責めていると、舌先に感じる蜜が次第に粘り気を増していく。沙夜の快楽が増している証だろう。いかにも清らかな沙夜らしい甘酸っぱい味を堪能しながら、悠馬は狭く細長い膣内で縦横に舌を巡らせた。

悠馬はいったん臀部の合わせ目から顔を上げると、膨らみきって、いまや痛いくらいにまで勃起した肉棒の先端を小さな膣孔に押し当てた。這いつくばっている沙夜は肉孔に当たる感触が柔らかい舌や唇から堅い亀頭へと変わったことに気づいたらしく、驚いた顔でこちらを振り返った。

「え、なに⁉」

「挿れるぞ」
悠馬は小さく微笑むと、引き締まった腰を抱えて一気に突き入れた。すでに唾液や蜜によって十分に潤っている肉の洞穴へ猛った肉傘を思いっきり押しこむ。
挿入は思いのほか滑らかだった。
「きゃあっ、は、ああ、んっ」
度重なる口唇愛撫のために充血し、桃色から鮮紅色へと色彩を変じている二枚の花びらを肉刀の切っ先で左右によりわけながら、狭苦しい沙夜の膣洞を穿っていく。先ほどまでとは比較にならないほど太くたくましい侵入者に驚いたかのように、ひそやかな膣粘膜がうねり、内部で小刻みに痙攣した。
「こ、こんな格好で……あんっ……お、男に……貫かれているなんて」
沙夜はか細い悲鳴をあげ続けているが、それは苦痛によるものではなく、誇り高い女剣士が獣の格好で貫かれるという屈辱感によるものだろう。
形のよい尻をくなくなと左右に振りたくる幼馴染みを眼下に見下ろしつつ、悠馬はすでに中ほどまではまった肉棒をさらに奥へと押し進めた。
「ああ、深いっ！」
最奥まで押しこむと、沙夜の雄大な裸身が左右に激しくうねった。尻肉が痙攣する

ようにぴく、ぴく、と震える。すでに処女を失っているものの、まだ二回目の挿入はやはり身体への負担が大きいのだろう。
「だ、大丈夫か、沙夜どの？」
「動かないで……そのまま」
ハアハアと息を乱しながら、沙夜がどこか不安げな表情で悠馬を見つめた。あらためて愛おしさがこみあげ、引き締まった女剣士の上体に背後から両腕を回した。何度も乳房を揉んだために乱れ、半ば以上ほどけているサラシの上から弾力性にあふれた二つの肉球を鷲づかみにする。
「や、あっ、だめ、胸はっ……！」
沙夜の双丘は綾乃ほど豊かではないものの十分な量感を備え、なによりも芸術品さながらに美しく、丸く整っている。弾性にあふれた左右の乳房を両手でつかんで扁平に押しつぶした。
悠馬は沙夜の抗議も無視してサラシの隙間に指を差し入れ、滑らかな乳肌をさすっていく。そのまま指腹を滑らせて頂上部にまでたどり着くと、尖りきった乳首を指先で強くはじいた。
「ん、うっ」

敏感な乳房への衝撃に沙夜は女らしいあえぎをもらしながら、白い小袖を羽織った背中を弓なりにのけぞらせた。快楽を面に出して身体をくねらせる女剣士に欲情を刺激された悠馬は下腹の充血を増し、秘孔にぴったりとはまりこんでいる肉勃起をさらに膨張させる。

「えっ、中で、まだ広がって……!?　あああっ！」

沙夜もまた胎内で肉棒が体積を増していくようすを感じ取ったのだろう。長く垂らした黒髪を振り乱して悲鳴をあげた。

「恥ずかしい、こんな、動物みたいに」

先日の処女喪失時には基本的な体位ともいえる本手（正常位）でのまぐわいだったが、今回は後取り（後背位）での交接だ。

いくら男勝りの沙夜といえど、意中の男性の目の前で、みずからのもっとも恥ずかしい場所や排泄器官を無防備にさらし、獣のごとく四つん這いになって交わるのは相当の羞恥を感じるのだろう。実際、白磁色の下腹部はまだ挿入を終えたばかりだというのに早くも薄い薔薇色に染まっていた。

悠馬はそんな乙女らしい含羞をあらわにする沙夜を見て、ますますの欲情を感じ、耳朶の辺りにそっと口づけを送るとゆっくり腰を動かし始めた。

「やっ、ああっ、中が、すれ……る！」
まだ少女のごとき堅さを残している膣粘膜をゆっくりとした律動でこすりたて、奥を突いていく。出し入れのたびに悠馬の太ももと沙夜の臀部とがぶつかりあい、ぱしん、ぱしん、と乾いた音が鳴り響いた。
ゆっくりとした往復運動を続けているうちに、締まりの強い粘膜が少しだけほぐれて蕩けだす。悠馬の肉棒から垂れる先走り液や沙夜自身がもらす蜜によって狭い内部が満たされ、潤いを増しているのだ。
ここぞとばかりに悠馬は突きの動きを強めた。人妻の綾乃と交わるときのように力強い抽送を連続して繰りだし、未成熟な膣内を一気に拡張する。
「ああっ、つ、強い！　あうん、はぁぁっ……ゆ、許してぇ、悠馬どの……」
沙夜もどうやら衝撃の強まりに心地よさを感じているらしく、可憐な嬌声が悠馬の耳に強く響いた。
「さ、沙夜どのの中、またうねって……くっ、すごい……！」
悠馬はますます勢いをつけて腰を前後にしならせていく。子宮にまで到達する衝撃を連続で繰りこみ、初心な女剣士の性感を掘り起こしていく。さらに直線的な運動のみならず、腰を回しこむようにして初心な膣内に別種の刺激を混合させた。

「なに、これ……私の身体、変になってしまう!?」
沙夜の背中がびくん、と弓なりにしなり、上半身に羽織っただけの白い小袖が激しくはためく。膣肉の締めつけがさらに増した。ただでさえキツキツの肉孔に絞られて強烈な愉悦を感じていた肉棒に、さらなる快楽を加えられた悠馬は鼻息も荒く叫んだ。
「ううっ、これは……私も、もうだめだ！」
炎のような射精感がこみあげてきて、我慢できる範囲をはるかに超えてしまう。悠馬はゆるやかだった抽送の速度を一気にあげた。欲望を解き放つことだけを考えて腰を振りはじめる。
ぱん、ぱん、ぱん、と悠馬の太ももと沙夜の尻肉のぶつかりあう音が道場の中に響きわたった。最後に一突き、最奥まで男根を繰りこんだ瞬間、限界が訪れた悠馬は劣情のすべてを浴びせかけた。
「ああ、出すぞっ！」
腰を小刻みに揺すり、沙夜の胎内いっぱいに灼熱した体液を送りこむ。放出された白濁は清らかな膣を満たし、子宮にまであふれかえった。
「ああ、悠馬どのが私の中で……達してくれた」
こちらを振り返った沙夜が幸せそうに微笑み、わずかに開いた唇から陶然としたた

め息をこぼした。まだあまり性交の経験を重ねていない沙夜が、いきなり強烈な快楽を得ることは容易ではないが、それでも悠馬が己の中で達してくれたことで強い満足感を得たのだろう。

「……嬉しい」

剣術道場の稽古では一度も見せたことがないほど柔和な表情で、悠馬に微笑みかける。そんな彼女を見ていると、とても一度や二度の射出では満足できそうになかった。もっと彼女を乱れさせたい、もっと彼女の艶姿を見てみたい――男として当然の欲求が湧き上がり、悠馬の下腹をカッと熱くさせた。

「えっ⁉　ま、まだ続けて……？」

胎内に収まったままの男根は、いまだ緩まない膣圧を受けてふたたび充血を増していく。若さにあふれた心棒はたちまちのうちに先ほど以上の硬度を取り戻し、なおも膨らんで沙夜の肉洞を内側から押し広げる。

「すごい、もっと硬くなって……ああ」

沙夜はうっとりとした表情で婀娜っぽい吐息をついた。

幼馴染みの感じている肉悦が伝染したかのように、悠馬の下半身にも絶え間のない愉悦の痺れが襲いくる。背筋から肉棒の先端にいたるまで快楽の波が押し寄せては引

き、身体の内部を満たしていく。
「と、溶けてしまいそうだ、沙夜どの。なんて締まりだ……ああ、すごい」
「わ、私も……こんなの……いや、おかしくなるっ……あああ、壊れるぅ！」
もはや恥も外聞もないとばかりに、沙夜は頭頂部で縛った漆黒の長髪を尾のように振りたくり、艶めいたあえぎ声を上げた。
「や、だ……ああ、来るっ、なに、これぇっ……!?」
狼狽をあらわに女剣士は身体をくねらせ、輝く汗の飛沫をまき散らした。悠馬の眼下で引き締まった双臀が間断なく震え、膣内では無数のヒダ肉が痙攣を続けている。
「沙夜どの……？」
今までとはようすの違う沙夜を見下ろし、悠馬はわずかに不審を覚えた。さらに激しい抽送を誘うかのように、沙夜の身体はひっきりなしに左右へくねり、上下に背中をしならせ、暴れ馬さながらの動きを見せている。
彼女の妖しい肢体に魅入られ、悠馬は腰の律動を速めて渾身の一撃一撃をきつく締まる肉洞へと叩きこんでいった。ぱんっ、と肉と肉の打ち合わさる音とともに子宮の入り口を亀頭で突いた瞬間、
「あああああっ……！」

着物の下に着こんでいたのか、豊満な女体の曲線にぴったりと張りつくような薄布の衣装と鎖帷子。胸の合わせ目が大きくはだけられた作りで、盛り上がった二つの膨らみの形や深い谷間までがはっきりとわかる。腰を覆う布の切れこみからはむっちりとした太ももが扇情的にのぞいていた。

「へ、へへ……随分と色っぽい格好じゃねぇか」

「こっちの不甲斐ないお武家さまより、俺たちのほうがいいってか」

露出の多い桔梗の格好を見て、男たちはたちまち喜色をあらわにした。にやけた笑みを口の端に浮かべながら、じりじりと近づいてくる。

「……下劣ね」

冷ややかなつぶやきとともに、桔梗の姿が陽炎のごとくかすんだ。

いや――そう思わせるほどの高速で移動したのだ。黒い衣装をまとった桔梗が爆発的な加速で男たちの囲みをあっさりとすり抜ける。

（速い！）

桔梗の尋常ならざる身のこなしに悠馬は驚嘆する。特殊な歩法でも使っているのか、まるで瞬間移動でもしたかのように錯覚するほどだ。

「鈍いわね。あたしの里での異名は《疾風》」

告げながら、美貌のくノ一はさらに加速した。懐に差し入れた手が素早くひるがえったかと思うと、夜闇に銀光が閃く。

「がっ」

「うがっ」

いくつもの苦鳴が連続して上がり、悪漢は次々とその場に倒れ伏す。苦無(くない)か手裏剣の類を放ち、四肢を射抜いたのだろう。男たちはいずれも手や足を押さえて苦しげにのたうちまわっている。

「てめえ、よくも！」

「――遅い、と言っているのよ」

背後から振り下ろされた男の匕首(あいくち)を、桔梗は振り向きざま、いつの間にか抜き放った懐刀で受け止めた。きん、と短く澄んだ音が響き、次の瞬間には華麗に身体を反転させた桔梗の蹴りが、男を中空高く吹き飛ばしている。

洗練されて一分の無駄もない、流れるような一連の動作を悠馬はしかと目に焼きつけた。

「命までは取らないわ。どこへなりと消えなさい」

桔梗が冷然と言い放つと、男たちは声もなく蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

（まさか……話に聞く忍びの者か？　本当に存在するのだな）
今の時代、ごく一部を残して忍びの者はほとんど残っていないという。悠馬とてその存在は講談で聞いたことがある程度だ。加賀藩においても、大坂の陣が終結した折に加賀忍軍は解体されたと耳にしていた。
（凛々しく美しい女性でありながら、なんというおそるべき手際だ）
悠馬はただただ桔梗の技量に感服した。単純な剣術であれば悠馬も引けを取るつもりはないが、先ほどのように飛び道具や不意打ちなどもまじえての『殺し合い』となれば、果たして目の前の美女と渡り合えるかどうか……。
「申し訳ありませぬ。とんだお目汚しを」
「い、いや助かりました。桔梗どのがこれほどの手練であったとは」
「さっき、あたしを助けてくだすったお礼ですよ」
青白い月明かりに照らされた桔梗は、体型がぴったりと浮き出る薄布の装束をまとっているせいか、酒の入った悠馬の目にはまぶしかった。まぶしすぎた。
（うう、桔梗どのの身体、なんといやらしい）
胸元を内側から勢いよく押し上げる双丘は半分以上が露出しているし、短い裾から垣間見える白い太ももやむっちりとした尻の曲線も妖艶すぎて、悠馬としては目のや

り場に困ってしまう。
「まだまだお礼をするには足らないわね、悠馬さま。もう少しあたしに付き合ってもらえないかしら」
身体をすり寄せる桔梗にうながされ、悠馬は手近の草むらへと連れ立って歩いていく。
「そ、そんな……私のほうこそ助けてもらって。お礼だなんて」
「うふふ、あたしを助けてくれたことだけでなく、お酒までご一緒してもらったんだもの。あたしも女としてそれ相応の礼をしなくては気がすまないわ」
「女として……？」
つぶやきながら悠馬の脳裏に浮かんだのは、以前、電光石火の素早さで桔梗に唇を奪われたときの記憶だった。
「き、桔梗どの、なにをするつもりで……」
戸惑いをあらわにする悠馬に対して、桔梗は無言のまま艶やかな微笑を浮かべていた。白魚を思わせるたおやかな手を悠馬の股間へと伸ばし、袴の裾を割った。
「ううっ」
褌の上から指先で軽く股間を撫でられると、十七歳の男根は若々しい反応を示し、

びくん、とひとつ脈を打った。もともと淫気旺盛な悠馬だが、今日はいつも以上に肉茎が鋭敏になったように感じる。
「あらあら、元気だこと」
妙齢の女性に性器を触れられているという妖美感もさることながら、周囲から漂ってくる草の匂いが、野外で男女の秘め事をおこなっているのだという意識を倍加させるとともに、悠馬の背徳感を強烈に刺激した。
「き、桔梗どの、このような場所では……誰が通るやもわかりませんし」
「あら、刺激があってよいと思うわよ。仇討ちをしようという方が小心でどうするの、ふふ」
（なぜ仇討ちのことを知っている？）
頭の中に生じた疑念は、爛々とした輝きを宿した双瞳で正面から見据えられると、たちまち霧散してしまう。まるで眼光自体が妖かしの力を備えているかのように、悠馬は動けなくなっていた。
次の瞬間、桔梗の手が袴の紐へと伸びてきた。
「あっ」
桔梗が紐を解いて袴をずりおろし、さらに褌までも取り去ってしまうと、悠馬は下

半身をむき出しにされた。両足の付け根で太い血管の浮き出した欲望器官が力強い脈動を繰り返し、激しい自己主張をおこなっている。
妙齢の美女に己の男根を真正面から見つめられている羞恥が、なぜか奇妙な興奮を喚起し、ますます高角度にいきりたった怒張が上下に揺れ動いた。
「まあ、これはまたご立派な。期待以上だわ」
桔梗は淫蕩な表情を浮かべて嬉しそうにつぶやいた。真紅に塗られた唇を桃色の舌でぺろりと舐め、地面にひざまずくと悠馬の陽根へ顔を近づけていく。
「あ、桔梗どの、待って――」
反射的に制止しようとした悠馬だが桔梗の動きは思いのほか素早かった。瞬く間に赤黒い亀頭を唇にくわえられてしまい、柔らかな舌腹が亀頭に巻きつき、雁首の辺りを這い回った。
「ううっ」
ただでさえ血流が集中していた肉茎は、柔らかな口内で絞られてたちまち完全な勃起状態へと達してしまう。
「んっ……ちゅ、うっ……はむっ……む、んんっ」
桔梗はちゅぱちゅぱと水音を立てながら、亀頭の先端を舐めまわしたかと思えば、

雁首の周辺を舌先でくすぐり、竿や付け根にいたるまで丁寧にねぶっていく。陰毛ごと吸いこんでは喉奥付近まで一気に飲みこんでしゃぶる。

人妻の綾乃以上に手馴れた、熟練した舌遣いだった。舌と唇を使って肉棒を甘く押しつぶされる愉悦に腰の疼きはますます大きくなり、悠馬は下肢を情けなく震わせた。

しかも女忍の性技はそれだけにはとどまらない。

「ふふ、悠馬さまはこういうふうに魔羅を可愛がられたことはあるかしら？」

桔梗は悪戯っぽく微笑むと、薄布でできた忍装束の合わせ目に手をかけて、ゆっくりと左右へ開いていった。漆黒の衣装が少しずつはだけて、夜闇に真っ白い肌が浮かび上がる。

綾乃よりもさらに一回り大きく豊かな双丘は、月光に照らされてわずかに青白い光沢を放っていた。朱鷺色の乳首や乳輪も乳房に比しておおぶりで、綺麗な真円を描いている。

「どう、あたしの胸？　気に入ってもらえた？」

「え、ええ……すごく、大きくて……いやらしい」

興奮のあまり感想の言葉も途切れ途切れに、悠馬はうめいた。迫力たっぷりな巨乳に圧倒されていた。

妙齢の美女は満足げに微笑むと、巨乳を下から両手ですくい上げるようにして軽く揺らしてみせた。果肉のたっぷりと詰まった双乳が、ぶるん、ぶるん、と勢いよくはずむ。迫力のある双丘を悠馬に見せつけながら、桔梗は姿勢を低くしてにじり寄った。

高角度にそそりたった剛直に乳房を近づけ、左右から中央に向かって密着させる。吸いこまれそうなほど深い谷間に挟まれると、柔らかでいて蕩ける感触が悠馬の分身を包みこんだ。

「う、おおおっ」

悠馬は月夜を仰いで盛大なため息をこぼした。こうして女性の乳房に己の魔羅を挟みこまれ、しごかれるような愛撫は初めてだ。このまま欲望の赴くままに精を放ってしまいたい――。

理性がすうっと薄れ、情欲をこめたまなざしを眼下のくノ一へ注いだ瞬間、脳裏に凛とした女剣士の姿が浮かんだ。

沙夜とはすでにただの幼馴染みではない。男女の一線を越え、はっきりと言葉で己の気持ちをつたえたわけではないが、重ねた肌と肌で互いの気持ちを確認したつもりだった。

「き、桔梗どの、私は、その……私には、心に想う人が……」

「あたしでは不満かしら、悠馬さま？」
「いえ、桔梗どのはとても魅力のある方だと思いますが」
見つめあっているだけで妖しい気分が昂ぶってしまうため、悠馬は視線を逸らし気味にして告げた。劣情に染まり、薄れつつある理性を総動員し、なんとか両手を突っ張って桔梗との距離をとる。
「こうして勇気を出して女のほうから誘っているというのに。あたしに恥をかかせる気なの、悠馬さま？　武家の男子がそのような甲斐性でどうするのかしら」
「ぶ、武家の男子……」
その言葉を持ち出されると悠馬としても弱い。据え膳食わぬは男の恥という考え方もあり、このまま冷たくあしらうのは気が引けた。かといって、このまま彼女を抱けば沙夜への裏切り行為になってしまう。
（私は、どうすれば）
逡巡する悠馬を待たずに、桔梗がさらに身体を寄せてきた。ふたたび二つの豊かな肉の塊が悠馬の分身に触れた。
「あ……」
火照った乳房の熱は肉棒を通じて悠馬の下半身にまでつたわってくる。先走りの液

が桔梗の乳房に染み、ねっとりと乳肌自体が吸いついてくるような感触があった。
「ふふ、なんてたくましいのかしら」
桔梗は唇をわずかに開いて、透明な唾液を垂らした。粘性の高い唾液が唇から糸を引きながら肉棒の先端や乳房の上部、深い谷間までも濡らしてヌルヌルにしてしまう。
「き、桔梗どの……だめだ」
悠馬が発した否定の言葉は、しかしひどく弱々しいものだった。実際、肉棒に感じている妖美な疼きはもはや理性をほとんど塗りつぶしていて抵抗する気力が湧いてこない。
戸惑っているうちに、積極的な桔梗の態度に押し切られた格好で、そのままなし崩しに乳房での奉仕が続行されてしまう。肉根に押し寄せる甘美な波は、たちまち悠馬の意識を桃色に染め上げた。
「さあ忍びの房中術をたっぷりと味わいなさい。あたしのおっぱいでたっぷりと気持ちよくなって、悠馬さま」
桔梗は両側から乳房を中央に押し寄せる格好のまま、ゆっくりと双丘を上下させ始めた。唾液や先走り液が潤滑油の役割を果たし、両の乳房に挟まれた肉棒は滑らかに谷間の中を往復する。

「くっ……ううっ。気持ちいい」
柔らかな摩擦感が竿の部分を心地よくこすり、初めて体験する愛撫に悠馬は下肢を震わせてあえいだ。
しかも桔梗は単純に乳房を上下に揺するだけでなく、動きにひねりを加えたり、左右の肉丘を真ん中に向かって思いきり寄せて肉棒を押しつぶしたりと多彩な変化をつけてくる。
双丘の動く方向が変わるたびに摩擦される角度も変わり、亀頭をこすられたかと思えば竿胴や付け根を絞られ、新たな肉悦がこみあげた。
「んっ……ふぅ……どう、感じているかしら」
息をはずませて両手で乳房を揺らしながらも、桔梗の態度には年上ならではの余裕と落ち着きがあった。百戦錬磨という言葉を思わせる風格さえ漂わせている。
逆に悠馬は体感したことのない愉悦にさらされ、桔梗の巧みな技巧もあいまって翻弄されるばかりだった。
「ま、待っ……もう、達して……くうぅっ」
まともに返答する冷静さもなく、悠馬は喉を震わせてうめいた。
「遠慮せずにイキなさい。夜は長いわ。まだまだたっぷりと気持ちいいことを教えて

あげる、うふふ」
桔梗がとどめとばかりに顔を下げ、小刻みに痙攣を繰り返す亀頭へ桃色の舌を這わせた。ひく、ひく、とうごめく鈴口を丸めた舌先で舐めあげ、くすぐるようにして刺激を強めていく。
一方で左右の巨乳によるこすりたてもさらに速度を増し、雁首から付け根にいたるまでをまっすぐに摩擦していく。腰骨からたちのぼった甘痒い感覚は四肢を駆け抜け、肉棒の芯を直撃したかと思うと、灼熱の射精衝動と化して悠馬を燃えたぎらせた。
「ぐうっ、も、もう駄目だっ」
悠馬は一声雄たけびをあげると、腰を大きくしならせながら欲情を解放した。びくん、びくん、と二度三度暴れ馬のごとく上下に跳ねた男根から、おびただしい量の精汁が放出され、桔梗の相貌に降りかかった。
白い額、まぶたの下、鼻の脇、唇の端……と次々に白濁の体液が着弾し、淫らな色彩に染め上げていく。
「ああ……」
桔梗は軽くため息をついて、悠馬の射精を一滴余さず顔面で受け止めてくれた。
「濃くて美味しいわ。やはり若い男の味は格別ね」

顔中に飛び散った白濁液にうっとりとした表情を浮かべ、桔梗が薄く笑った。
（桔梗どのの顔、私の精でべっとり染まっている）
先ほど悪漢たちを一瞬にしてたたき伏せた美貌の忍びが悠馬の足元にひざまずき、彼の子種を顔中に浴びているさまを見下ろすと、胸が疼くような征服感を覚える。半ば無意識のうちに股間の逸物は血流を増し、ふたたびいきりたった。
「ううう」
十七歳という若さならではの回復力だが、それだけではない。桔梗の艶然とした魅力と卓越した性技にさらされていると、まるで妖術でもかけられているかのように自身の欲望をどんどんと引き出されてしまうのだ。
おまけに下腹からは間断なく燃えるような官能の炎が湧きあがっていて、まるで自分の身体ではないような感覚だ。
「まだまだできるのでしょう？　まあ、もうこんなに堅く……あの方とは大違いね」
あの方、というのが誰を指しているのか気になったが、次の瞬間には尻の谷間に桔梗の指先が這ってきて、たちまちそんな思考は吹き飛ばされてしまう。
「そ、そこは……駄目だ、桔梗どの。そんな場所を触るなんて、汚い」
本来ならけっして他人に触れさせるべきではない排泄器官だった。ただ桔梗は電光

石火の素早さで悠馬に逃げる隙さえも与えてくれなかったのだ。悠馬の側面にひざまずいた格好の桔梗が、悠馬以外には誰も触れたことさえない窄まりを撫でた。
「あら、汚くなんてないわよ。悠馬さまはここでの快感をまだ知らないようね。あたしが教えてあげるわ、ふふ」
丸い爪の先で肛門の周囲を軽く引っかきながら、放射状の皺を引き伸ばすようにしてくすぐってくる。悠馬自身は一度だけ沙夜の菊門を指で愛撫した経験があるが、己の排泄器官を女性に愛撫されるなど考えたこともなかった。
（くすぐったい……？　いや、むずむずとして、気持ちいい……？）
初めて味わう性悦に悠馬は下肢をくねらせ、断続的なうめき声をもらした。桔梗の指先が螺旋の動きを描きつつ、徐々に周辺から肛門の中心部へと向かってくるのがわかる。
桔梗は菊門への愛撫を続けながら、一方で首を斜め前へ伸ばすようにしてそそりたった肉棒に唇を寄せた。悠馬の左腰を抱くようにして右手を肛穴へ、舌と唇を男根へそれぞれ這わせている。
怒張した竿にこびりついた白濁の樹液を、桔梗はみずからの舌で舐め取りながら清めていく。先ほどの放精で痺れたような状態の肉棒にふたたび熱い血潮が通い、新た

な快美感が湧き上がった。
「う、あああっ」
二種の愉悦を同時に送りこまれると、腰骨から背中にかけて甘ったるい疼きが駆け抜け、悠馬は下肢をがくがくと震わせてうめいた。
「す、すごい、ああ……桔梗どの、こんなのは初めてだ」
口内で吸い絞られた肉茎に、自在に動き回る桔梗の舌が這い回り、亀頭から竿、根元にいたるまで撫であげていく。柔らかな感触が肉茎のどこかをくすぐるたびに、尿道が引きつるような愉悦が走った。
踏ん張った両下肢がひっきりなしに痙攣し、尻の穴がキュッと窄まるのを自覚しながら悠馬は二度目の絶頂に向けて駆け上がっていく。
「うう……駄目だ、我慢できない。ああ、たまらぬっ」
桔梗の性技が卓越しているためか、すでに一度放出しているとは信じられないほど鮮烈な妖悦が腰の芯に湧き上がり続けた。
「飲ませ……ん、う……悠馬さまの……は、むっ……き、桔梗の、口……ちゅ……に、たくさん……んんっ」
凛とした眼光を放ちながら肉棒をしゃぶる桔梗に懇願され、悠馬はどう猛な雄たけ

びをあげて二度目の欲望弁を解放した。亀頭がさらに一回りも二回りも膨らんだかのような感覚があり、同時に陰嚢から尿道にかけて熱い潮流が駆け抜けた。
「んっ……ぐぐぐっ！」
さしもの桔梗も瞳を丸くして、おびただしい量の樹液を口内で受け止めた。口腔内にほとばしった精液は一度目の比ではなく、まさしくあふれかえるほどの量となって荒れ狂う。
桔梗の歯茎や口蓋、頬の裏、喉とあらゆる場所を侵食しながら、悠馬の放った精液は彼女の口の中……さらにその奥にまで注ぎこまれていった。
「む、んんっ……は、ふうっ」
ようやく射精の勢いが下火になってくると、桔梗は嬉しそうに目尻を細め、ずるずると残りの精液を吸引した。さらに駄目押しの愉悦を味わわされ、悠馬はその場に崩れ落ちそうなほど脱力する。
「ああ……」
「ふふ、ご馳走様」
最後の一滴まで悠馬の濁液を飲み干した桔梗は、手の甲で軽く唇をぬぐってから立ち上がった。その勢いで黒い装束の合わせ目からこぼれている双乳が上下にぶるん、

と勢いよく揺れる。
「はあ、はあ……」
悠馬は荒い息をつきながら、人が通るかもしれない草むらで悠然と仁王立ちしていた。二度の放精でさすがに息が乱れたものの、疲労感はまったくといっていいほどなく、むしろ射精すればするほど力がみなぎってくる気さえした。
口や指、乳房だけではなく今度は直接、桔梗の身体の中を味わってみたい――。
綾乃や沙夜に対する想いとは別に、雄としての本能的な欲情と征服心が悠馬の胸中で煮えたぎっていた。
「いい目ね、悠馬さま。まだまだ物足りないのではなくて？」
「わ、私は……」
心の底を見透かしたような桔梗の双瞳に見つめられて、悠馬は声を詰まらせた。たしかに二度の射精で爽快感を得てはいたが、まだまだ満足していないのも事実だ。なによりも悠馬はまだ桔梗のもっとも秘められた部分を味わっていない。
貫きたい。貪りたい。女体の奥まで征服したい。
男としての原始的な欲望は昂ぶるばかりで、十七歳の若い獣性はもはや制御できないほどにまで荒れ狂っていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!